

オンライン伴走支援が生活困窮世帯の子どもと保護者の心理的変化に及ぼす影響

—ランダム化比較試験による検討—

池田利基¹・金子楓¹・三宅善子¹
(¹認定特定非営利活動法人カタリバ)

問題と目的

経済格差による体験格差をもたらす側面

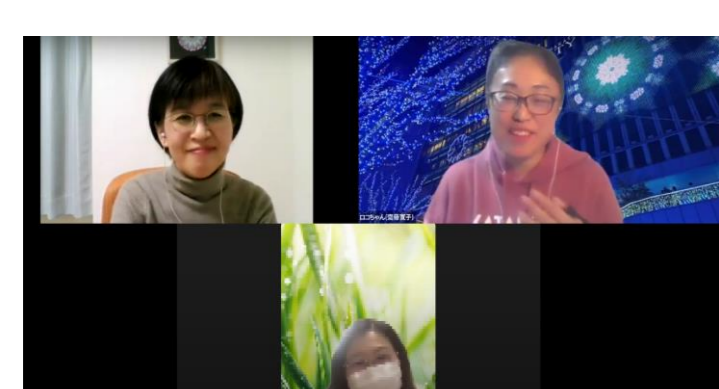
生活困窮世帯の家庭の子どものほうが、非生活困窮世帯の家庭の子どもよりも学校外の体験活動（スポーツ、文化芸術活動、自然体験）を何もしていない（公益社団法人チャンスフォーチルドレン、2023）

体験への投資は子どもの認知能力（i.e., 学力）だけでなく、非認知能力（i.e., 自尊感情）の向上へとつながりやすい可能性が指摘されている（中室、2023）。

.....生活困窮世帯への体験機会を提供することが重要となる

オンラインで体験格差の解消を目指す「キッカケプログラム」

保護者伴走プログラム



保護者面談子育て経験のあるペアレントメンターによって、安心できる場の構築をねらう

Note: その他、各地域の団体へのリファー、オンラインの体験活動、心理士との面談機会もプログラムに含まれる。

子ども伴走プログラム



キッカケミーティング。大学生～20代のメンターと一緒に目標設定、目標達成を実施し自尊感情等の向上をねらう



オケイコプログラム。edtech教材を用いて学力の向上をねらう

先行研究で明らかになったこと（中室・山口、未公開）

保護者伴走 / 子ども伴走の両プログラムが子どもと保護者の心理的変化に及ぼす効果を検討

実験群： **保護者伴走プログラム** + **子ども伴走プログラム** + PC貸与
対照群： PC貸与のみ

**プログラム終了後の子どもたちの自尊感情及び授業理解度が実験群>対照群
...それでは、保護者伴走プログラムはどのような影響を持つのか？**

本研究で明らかにすること

保護者伴走プログラムが子どもと保護者の心理的変化に及ぼす効果を検討

実験群： **保護者伴走プログラム** + **子ども伴走プログラム** + PC貸与
対照群： **子ども伴走プログラム** + PC貸与

Note: 中室・山口（未公開）を参考に、群は母親学歴を基準にランダムに割り当てた。

方法

調査対象者

実験群：78世帯（保護者78名 / 子ども81名）
対照群：77世帯（保護者77名 / 子ども82名）

Note: 子どもは小学生が62名、中学生が55名、高校生が12名。保護者の平均年齢は43.68歳（SD = 5.51）。ほぼ全世帯が母子家庭であり、世帯年収の平均値及び中央値は210万円であった。

調査内容

保護者票

- 自己効力感尺度（三好、2003）
- SDQ（Goodman & Scott, 1999）
- K6（Furukawa et al., 2008）
- 親子間の会話の頻度（オリジナル）
- 経済資本へのアクセス（オリジナル）
- 文化資本へのアクセス（オリジナル）
- ...ect

子ども票

- 自尊感情尺度（桜井、2000）
- ENDCORE簡易版（藤本・大坊、2007）
- 時間的展望尺度（白井、1994）
- K6（Furukawa et al., 2008）
- 授業理解度（オリジナル）
- ...etc

Note: 調査内容は現場運営チームの意向をヒアリングしつつ協同で決定した。保護者票ではデモグラフィック変数として、子どもの性別、年齢、母親の学歴、居住地などを取得した。調査回収数は実験群で、保護者71名/子ども77名、対照群で保護者58名/子ども55名だった。子ども票は子どもと保護者の同意を得て、保護者票は保護者の同意を得て実施した。

介入内容

保護者伴走プログラム

頻度：月1回で全6回。1回につき30分。
形式：ペアレントメンター2名&保護者1名
その他：心理士などへ専門的な相談が可能な場の設定

子ども伴走プログラム

頻度：週1回で全20回。1回につき小学生は50分程度、中学生は20分程度。
形式：小学生はグループ面談、中学生は個人面談

Note: 本プログラムは完全オンラインで実施されるため、プログラム参加のためのPCとWi-fi環境も貸与した。運営事務局が、インターネットへのアクセス制限などの管理を実施した。保護者のプログラム出席率は83.6%、子どものプログラム出席率は92.0%であった。

調査時期

2022年5月	2022年9月	2023年2月	2023年9月
1回目調査	2回目調査	3回目調査	4回目調査
本発表の対象			本発表の対象外

結果と考察

説明変数

STEP1：群、母親大（院）卒ダミー、三大都市圏ダミー、新規メンターダミー（子ども票のみ）、中学生ダミー、高校生ダミー、子どもの性別、各アウトカム指標の1回目の得点
STEP2：群と各変数との交互作用項

目的変数

各アウトカム指標の2回目の得点

保護者票の結果

自己効力感の階層的重回帰分析の結果	
群	.15 *
母親大（院）卒ダミー	-.09
三大都市圏ダミー	-.05
中学生ダミー	.00
高校生ダミー	-.09
子どもの性別	.06
1回目の得点	.67 **
R^2 .47 **	

①自己効力感尺度（左表参照）
実験群>対照群

②SDQ
統計的有意な回帰式はみられない

③K6
統計的有意な回帰式はみられない

④親子間の会話の頻度
統計的有意な回帰式はみられない

⑤経済資本へのアクセス
実験群>対照群

⑥文化資本へのアクセス
母親大卒以上の場合、実験群>対照群

子ども票の結果

ENDCOREs（表現力）の階層的重回帰分析の結果	
群	.07
母親大（院）卒ダミー	.04
三大都市圏ダミー	.16 *
新規メンターダミー	.10
中学生ダミー	-.07
高校生ダミー	-.18 +
子どもの性別	-.07
1回目の得点	.56 **
群*母親大（院）卒ダミー	-.17 *
群*三大都市圏ダミー	-.08
群*新規メンターダミー	.11
群*中学生ダミー	-.10
群*高校生ダミー	-.10
群*子どもの性別	.04
群*1回目の得点	-.06
ΔR^2 .06 +	
R^2 .47 **	

①自尊感情尺度（桜井、2000）
統計的有意な回帰式はみられない

②ENDCORE簡易版（左表参照）
母親大卒未満の場合、実験群>対照群

③時間的展望尺度（白井、1994）
統計的有意な回帰式はみられない

④K6（Furukawa et al., 2008）
統計的有意な回帰式はみられない

⑤授業理解度（オリジナル）
統計的有意な回帰式はみられない

本研究で明らかになったこと

☑生活困窮世帯の保護者へのオンライン支援は、保護者及び子どもの心理的変化にポジティブな効果がある。

☑実験群における保護者票の自己効力感の増加について。ピアサポートに関する研究では、同じような状況に置かれている母親たちに自分の悩みや疑問を聞いてもらい、疑問や悩みを解決したり、自分が他の母親の相談にのることで、他の母親の困り事が解決されることを実感し、自己効力感を高めることが分かっている（島田・杉原・橋本、2019）。今回の結果についても同様の効果が考えられ、ペアレントメンターに対して、自分の育児の悩みや疑問を話すことで解決したり、ペアレントメンターの困りごとを解決することで、保護者の自己効力感が高められた可能性がある。

☑実験群における子ども票のENDCOREsの表現力の増加について。親子間の会話の頻度が増加していないにもかかわらず、子どもの表現力が増加しているということは、親子間での会話の何らかの質の向上が示唆される。保護者支援プログラムにより保護者の表現力が上昇し、その能力が子どもに学習された可能性もあるが、今後詳細な検討が必要。

本研究の遂行にあたり、認定NPO法人カタリバのオンライン事業「キッカケプログラム」の各メンバーには、ヒアリングから調査票の作成や実施に至るまで大変お世話になりました。心から感謝致します。